

中学生の生成AIの利活用に必要な情報モラル測定尺度の開発にむけた検討

倉田 伸^{*1}, 鶴田 利郎^{*2}, 佐藤 和紀^{*3}, 大久保 紀一郎^{*4}

A Study on the Development of an Information Moral Scale for Utilizing Generative AI by Middle-School Students

Shin KURATA^{*1}, Toshiro TSURUTA^{*2}, Kazunori SATO^{*3}, Kiichiro OKUBO^{*4}

1. はじめに

1.1 背景

近年、対話型生成AI（以下、生成AI）の有効な利用が学校現場で求められているのに伴い、情報モラルが一層重要になる[1]。文部科学省[2]は情報モラルを「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」と示しているが、態度の面だけではなく、情報技術による影響に関する知識や危険回避のための判断かつ利活用も観点に含めている。一方、生成AIの利活用の際の留意点である認知バイアスやエコーチェンバー、ハルシネーションなどに対しては批判的思考が重要である。批判的思考は、従来からメディア・リテラシー（以下、ML）の分野で特に注目されてきた[3]。学習指導要領にはMLという言葉が未記載だが[4]、学校現場での生成AIの利活用には、これまで情報モラルにも含まれていたMLの観点がより重要になる[5]。つまり、学校現場において生成AIの利活用を進めていくには児童生徒の情報モラル指導が必須となるが、生成AIの利活用を前提とした情報モラルは従来の枠組みを超えて議論されていく必要がある。しかし、現段階においてその整理は十分ではない。

最近、生成AIの機能を提供する多くのサービスが年齢制限を撤廃しているが、UNESCO[6]は生成AIを利活用できる年齢を13歳以上にすべきだと推奨している。そのため、学校現場では中学生以上の生徒中心に生成AIの利活用が進むと予想されていて、現に、文部科学省リーディングDXスクール事業の生成AIパイロット校では生徒に活用させる事例は中学校からが多い[7]。学校現場での生成AIの利活用にむけて情

報モラルを指導するには、従来の情報モラルの枠組みを再検討したうえで適切に評価・測定するツールを開発することが必要である。特に初期の生成AI利用者である中学生の生成AIの利活用に必要な情報モラルを評価・測定するツールの開発は、教育現場で生成AIの利活用を促進させるうえでも喫緊の課題である。つまり、現状では生成AIの利活用が中学校から進められているため、まずは中学生を対象とした評価・測定ツールが必要であるといえる。

1.2 先行研究

これまで中学生の情報モラルを評価するチェックリストが開発されてきた。川崎市総合教育センター[8]は、情報モラルを含む情報活用能力の体系表をもとに、中学生を含む子どもの発達の段階ごとのチェックリストを開発した。村上ほか[9]は、小中学校で使用できるチェックリストを開発し、「情報と情報技術の適切な活用」「問題解決・探究における情報活用」「情報モラル・情報セキュリティ」の3観点で整理した。ただし、高次で質的な判断や行動を含む場合はチェックリストより尺度が適する[10]。よって、様々な状況で判断を伴うような情報モラルの測定には、チェックリストよりも尺度のほうが適している可能性が高い。

中学生を対象とした情報モラルに関する尺度開発に関する研究も行われてきた。宮川ほか[11]は、中学生の情報モラルに対する意識を把握する尺度を開発し、道徳的規範意識が情報モラルに対する意識に強く関連することを示した。酒井ほか[12]は、中学生のインターネット依存傾向の改善に活かすため、イン

^{*1}長崎大学教育学部 (Faculty of Education, Nagasaki University)

^{*2}専修大学ネットワーク情報学部 (School of Network and Information, Senshu University)

^{*3}信州大学学術研究院教育学系 (Institute of Education, Shinshu University)

^{*4}京都教育大学教職キャリア高度化センター (Center for Educational Career Enhancement, Kyoto University of Education)

受付日: 2025年8月27日; 再受付日: 2026年1月14日; 採録日: 2026年3月13日